

## 中国社会および中国社会学の現状

### —復旦大学社会発展与公共政策学院訪問報告—

The current situation of the Chinese society and Chinese sociology  
— The visit report on Fudan University School of Social development and public policy —

松村 茂樹<sup>1</sup>, 角南 梨央<sup>2</sup>, 高尾 和泉<sup>2</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科, <sup>2</sup>大妻女子大学大学院人間文化研究科

Shigeki Matsumura<sup>1</sup>, Rio Sunami<sup>2</sup>, and Izumi Takao<sup>2</sup>

<sup>1</sup> Department of Communication and Culture Faculty of Language and Literature, Otsuma Women's University

<sup>2</sup> Graduate School of Studies in Human Culture, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：中国社会, 中国社会学, 復旦大学

Key words : Chinese society, Chinese sociology, Fudan University

#### 抄録

大妻女子大学人間生活文化研究所 平成28年度 共同研究プロジェクト「アジア太平洋地域における諸問題解決に向けての総合研究」(課題番号:K2814 研究代表者:松村茂樹)では、平成29年3月13日、メンバーの松村茂樹・角南梨央・高尾和泉が、中国上海の復旦大学社会発展与公共政策学院を訪ね、同学院の胡守鈞教授・徐珂副教授と共に、「中国社会および中国社会学の現状」と題する座談会を行った。本稿は、その論点を報告資料の形にしたものである。なお、当日の記録は角南および高尾が行い、松村が全体を調整してまとめた。よって、文責は松村にある。

#### 1. 中国社会の現状

中国社会は急速に発展してきた。改革開放により、計画経済から、社会主義市場経済へ移行し、経済活動や言論の統制が緩和されるとともに、投資が行われるようになった。その過程で腐敗が進出し、「打虎拍蝇（虎も蠅もたたく）」という強硬な姿勢が求められるようになったが、改革開放はこれからも堅持されるだろう。これこそが中国社会の未来を開く唯一の道だからだ。

また、改革開放により、国家分配が行われていた集団の時代から、「個」を考える時代へと変化した。以前のような国家から与えられる人生ではなく、個人が自身の人生を決めるという個人主義が台頭してきた。ただ、個人主義には留意すべき点がある。個人主義とは自分勝手に生きることではなく、他者を尊重することが前提となる。したがって、秩序を有する個人が他者を尊重しつつ、常に社会貢献を心がける必要がある。そういった考え方を“合理的個人主義”と言い、“合理的個人主義”に基づいた生き方を“共生”、それができ

る人間のことを“公民”と呼ぶ。“公民”が作り出す社会において、腐敗はあり得ない。今後は、個人主義からさらに先進的な“合理的個人主義”社会へと移り変わっていくだろう。

#### 2. 中国社会学の現状

中国社会学は、文化大革命時代は右派とされ、停滞の一途をたどっていたが、改革開放後の80年代に復活し、90年代以後、李鉄映が社会問題に目を向け、研究を重ね、資料を蓄えることで停滞は破られた。その際、国際社会も視野に入れ、とりわけ米国社会学を手本にした。しかしその際、完全なる模範ではなく、中国の独自性を見出す努力がなされた。

また、米国・欧州・日本・中国の経済発展の速度には大きな差がある、中国は最も経済発展の速度が速く、人の一生で例えるならば三代でようやく成し得ることを一代でやってのけたようなものである。それは、中国が米国・欧州そして日本の経済発展を手本とし、学んできたからに他ならない。

いずれ中国の経済発展は一段落を迎える。これまでのような先進国に学ぶ姿勢ではなく、自らの独自性をもって問題を解決し、更なる発展を目指すのが社会学の果たすべき役目である。

### 3. 少子高齢化問題

近年中国では、少子高齢化が社会的問題になっており、中国社会学においても重要なテーマとなっている。

メンバーの角南は、修士論文で「中国における少子高齢化問題」をテーマとし、少子高齢化の発生要因を政治的要因と社会的要因の二つに分けた。今回の座談会では、政治的要因の「一人っ子政策」により発生した社会問題である「失独家庭」と「黒孩子」を取り上げた。

「失独家庭」と「黒孩子」は、中国社会で大きな問題になっている。これらの問題に中国政府は対策を立てて行かなければならない。「失独家庭」が増加し、将来に不安を抱えている高齢者が多いため、彼らのために養子縁組を行う必要がある。

角南が論文で提案した「失独家庭」と「黒孩子」を養子縁組でつなげるという方策も有効であり、政府が考えていかなければならない課題である。

また、2016年から「全面ふたりっ子政策」が施行された。まだこの政策が都心部では有効とは言えないが、時間が経てば多くの夫婦は子どもをふたり生むようになるだろう。子どもがいるという安心感は大きい。

中国では「黒孩子」の問題は大きな社会問題であり、中国の実際の人口を明らかにできない部分も問題になっている。よって政府は、人口を明らかにするため、第6回人口センサスにおいて「黒孩子」の希望があれば人口サンセスに参加できるようにした。もともと中国では、「黒孩子」は、中国の政策に反して生まれてきた人たちであるため、罰金などがあり、参加したら罰金を取られるので

はないかという不安もあり、なかなか参加できないのが現状である。また、「黒孩子」は、女子が多く、社会的弱者としての不安もあって、参加が少なくなるのだ。

しかし、人口サンセスを何度も繰り返し、不安がなくなっていけば、戸籍がない人たちも人口サンセスに参加するようになり、中国における人口の現状は近々明らかにすることができるようになるだろう。

大都会の上海では、子どもを生む人が少ないという状況も、変化を見せていこう。これが定着すれば、子どもも増えていくと考えられる。ただ、政府が「全面ふたりっ子政策」を施行するのは、少し遅かったようだ。

### 4. 日本社会との比較

日本の社会は、中国の社会と比較して、どのような差異があるのだろうか。近年、日本に旅行に行く中国人は多くなったが、皆口を揃えて、日本は清潔であるという。どうして街を清潔に保てるのだろうか。

日本には、独特な「世間」というものがあり、ほとんどの日本人は「世間」の論理の中で生きている。「世間」は規範でもあり、相互監視のシステムでもあるため、例えば「随地吐痰（ところ構わず痰を吐く）」などということは、「世間」が許さないのである。

これが、日本が清潔であることの一理由かもしれない。ただ、相互監視システムでもある「世間」は、絶対的なものではなく、常に揺れ動いている。よって、「世間」に合わせて生きねばならない日本人は、常にそれに気を配っていなければならず、ストレスが大きくなるのである。

中国にも「世間」はある。それが日本のものとのような部分で同じで、どのような部分で異なるのかは、今後考えるべきテーマかもしれない。

---

**Abstract**

---

This is a report of “An interdisciplinary study for solving the problems in the Asia-Pacific region” (Principal Investigator: Shigeki Matsumura), Interdisciplinary Research Project 2016 of the Institute of Human Culture Studies (IHCS) at Otsuma Women’s University. In this study, Shigeki Matsumura, Rio Sunami, and Izumi Takao visited the School of Social Development and Public Policy (SSDPP) at Fudan University to hold a round-table to talk about “The Present Circumstances of Chinese Society and Chinese Sociology” with Professor Hu Shoujun and Associate Professor Xu Ke on March 13, 2017. This article describes the point of argument of the talk. Since Sunami and Takao had taken notes at the talk, and Matsumura put together their notes and adjusted, Matsumura takes full responsibility for this article.

---

(受付日 : 2017 年 6 月 13 日, 受理日 : 2017 年 6 月 22 日)

松村 茂樹 (まつむら しげき)

現職 : 大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科教授

専門 : 中国文化論, アジア太平洋国際交流論

学位 : 博士 (文学, 筑波大学)

留学 : 1982~1984 浙江美術学院国画系, 中央美術学院美術史系

2015~2016 ボストン大学客員研究員